

『哲学の探求』第38号刊行にあたって

ありふれた日常の風景を透き通ったまなざしで見つめ、そこから掴みとった問題を額に汗してとことん考えぬく——これが哲学者の探求のあり方であるならば、互いに議論を交わすなかでひとつの問題を共に考えぬくというあり方もそうであろう。この「共に考えぬく」というあり方は、批判と応答のなかに思考を招き入れ、それを磨き上げてゆく共同作業のかたちを示している。本書は若き philosophers たちによる共同作業によって紡ぎ出された思考の結晶である。

『哲学の探求』は、毎年開かれる哲学若手研究者フォーラム（略称「若手フォーラム」、旧名称「全国若手哲学者研究ゼミナール」）の記録であり、成果を集めた雑誌である。哲学若手研究者フォーラムとは、全国各地の学部生・大学院生・オーバードクターを中心として、毎年開催されている哲学研究集会である。本フォーラムの目的は、大学・地域・専門・身分の垣根を越え、哲学に関心のある人びとが自由に議論する場を提供することにある。

本フォーラムは、宿泊施設付きの施設にて一泊二日の日程で開催され、あるテーマに沿って大学教員の方々を招いて行われる「テーマレクチャー」と、事前に応募した参加者が自らの研究の成果を発表する「個人研究発表」を主軸として構成されている。本フォーラムの特色として顕著なのは、他の哲学系の学会と比べて発表者に時間的な余裕をもたせ、質疑応答の際に活発で実り多い議論を交わすことができるということであろう。そして本フォーラムは、自由闊達な議論のなかでじっくりとものを考えぬく姿勢と共に鍛えあげていくための場を提供してきたが、それと同時にもう一つの場を提供してきた。それは、一日目の夕刻以降に開かれる、哲学を志す者同士の交流の場である。発表の終わった後の懇親会や二次会（あるいは宿泊施設での三次会！）でも、ときには他の参加者のまなざしの鋭さに驚き、ときには粗っぽい自らの構想や議論を批判してもらい、それに応答することによって、自らの言葉で自らの思考を紡ぎ出すための絶好の機会が訪れる。このような機会を参加者に提供することは、本フォーラムの精神に沿うものであろう。

今号に掲載されている論文は、2010年7月17日・18日に国立オリンピック記念青少年総合センター（東京・代々木）にて開催された、本フォーラムにおけるテーマレクチャーと個人研究発表にもとづいている。

テーマレクチャー「知覚の哲学」では、河野哲也（立教大学）、篠原成彦（信州大学）、村田純一（立正大学）の各氏に講演をいただき、知覚の本性に関する最先端の研究の一端に触れることができた。質疑応答においても活発な議論が交わされ、幸いにも今号にはすべてのレクチャラーから論文を寄稿していただいている。さらに、今号には、個人研究発表と萌芽研究セッション枠での口頭発表にもとづく論文が、計6本収録されている。いずれも長時間に亘る議論を経て練り上げられた力作であり、読者は、執筆者の思考の軌跡を追いつめ自分で考えてみることで、共に考えぬくことを追体験できるであろう。

2011年度のフォーラムは、7月16日・17日（土・日）の二日間で、例年と同様に、国立オリンピック記念青少年総合センター（東京・代々木）にて開催される。次回のテーマレクチャーのタイトルは、「論理学の哲学」である。岡本賢吾（首都大学東京）氏と金子洋之（専修大学）氏にご講演いただく予定となっている（その講演要旨は、すでに今号187～194ページ、および、ホームページ<http://www.wakate-forum.org/>に掲載されているのでチェックされたい）。

本フォーラムは、広く参加者を募集している。最新の研究成果を発表したい方、多くの人から意見をもらって論文の構想やアイデアを練りあげたい方、萌芽的な論考を検討してもらいたい方など、さまざまな方々の発表をお待ちしている。参加や発表に際して、必要な資格は存在しない。多くの方々の参加を切に願う（次回フォーラムの詳細は、本号185ページに掲載されている）。

ひとの紡ぎ出した思考の結晶を愛することはたやすい。ショーケースに並べられた結晶を眺めるのではなく、それを自らの手で溶かしたり作ったりするのはむずかしい。しかし、その困難に抗いつつ、共に考えぬいた結果として得られた自らの思考の結晶は、かけがえのない輝きを放つと思われる所以である。

2010年度・世話人総務担当
萬屋 博喜